

内外新聞

至從
出

西垣文庫
文庫 10
7347
1



閏四月十七日



內外新聞

第一

第七日
每出板

知新館

神戸新聞 西四月廿五日 廿八日出

○ 第五月十八日 我四月廿六日夜中ノ大雨ニヨリテ

當地ニ出来セシ堀切ノ不行届ヲ證ス可シ

近頃美麗ニ造營シタル米國コンシユル名役

館ノ前面ニアル砂濱ハ斯ノ大雨ノ水害ヲ

醸セリ 曩エテ人堀切ヲ營シ時勞煩ヲテキ

シトル名社中ノ居館ハ尤モ此水害ヲ受タ

リ軒下并ニ商店ヘノ通行ハ暴流ノ為ニ大

ニ害セラレタリ是日本人ノ建築ノ術ニ疎

西四月廿五日

キカ故也

○大坂ヨリノ報告ニ云

大日本 皇帝ハ未タ大坂ニ滞在ナリ供奉ノ
面々モ多人數輻湊シテ大体市中ニ充滿ス
ルカ故ニ如何ナル小家ト雖借料等非常ニ
貴騰セリ茲ニ於テ考フレハ大坂ニ開港セ
ント欲スル人ハ斯ノ如キ借貸ホノ高價ヨ
シテ畢竟盛ニニ行レシ商法モ漸々衰微
傾クノ不幸ニ遇セン

○第五月十七日 我四月廿五日 朝サラミス 船ト云フ

蒸氣船ハ舳ニ英國公使ハルリーハークス
人ノ旗章ヲ揚ケテ入港セリ時ニラセー
名船ヨリ定例ノ祝砲ヲ發セリ斯テ暫時ノ後
サラミス船ハ大坂ニ出帆シ再ヒ翌日夕ニ
至テ歸着セリ

○同日夕ロト子 船副將ケツヘル 名ノ旗章
ヲ揚テ入港セリ時ニ米國戰艦 ダンカン コル
ヘット オナイタ 名船ヨリ祝砲ヲ發セリ

○翌十八日

我四月廿六日朝ゼ

グ_ラ船ハ英國公使ハ

ル_リバークス

名ノ護衛

トシテ兵士平數

名ト海軍士卒ヲ来セテ大坂へ發セリ

○同日

ロツト子_ーオセ_ーン

ノ二艦モ亦大坂

へ赴ケリ時ニ天保山ノ砲臺_{ダイバ}并ニ米_{アリ}利堅艦

コ_ルヘツトヨリ祝砲ヲ發セリ

○同日

夕ヘルマン

名船二百五十人ノ婦人小兒

ヲ来セテ江戸ヨリ来着_レ報告ヲ陸ニ通ル

ヤ直チニ豊後洋ニ向テ發セリ此報告ニ依

テ左ノ新聞ヲ得タリ

○會津并其外等凡テ廿万五千ノ兵ヲ率テ江

戸へ向テ發セリ一橋_{徳川}

也ノ海軍モ亦海軍

奉行某等七隻ノ軍艦ニ將トシテ會津兵ノ

應援ヲセンカ為メ昼夜蒸氣ヲ燃_{モヤ}シテ江戸

海ニ在リ當時江戸城ハ已ニ

皇帝ノ所領ニ属セリ且ツ碇泊スル船ハ江戸

在ル女人童子ヲ他所へ運漕スルノ用意ヲ

ナセリ

論者曰是金夕空シキ風説ニシテ信スルニ足ラス
暫ク千五百人ノ兵アリト聞クニ今二十万五千
人ノ兵有リトハ虚説ノ甚シキ者歟

○十八日朝我四月廿六日横濱へ發セント用意セシ
バルクオレークス名船ハ延期シ翌日我廿七日出
帆セシ時未タ港口ヲ出サルニ不幸ニシテ
洲ニ乗セタリ時ニ在港ノオセーシ船ヨリ
速ニ挽舟ヲ出シタレ凡東風殊ニ甚シクシ

テ挽トタフ能ハス又ストーニチ船ヨリモ挽
舟出シタレ凡亦能ハス後漸クシタラアリ満汐ノ
時ニ當リテコツクチマヘルト云小軍艦ヲ
以テ挽出タセリオレークス船ハ聊モ損害
ナクシテ横濱へ出帆セリ

○香港ホクコンニ在ル英國コンシユル後メトホル
スト名人ハ上海ノコンシユル医官ウインチ
エストル名人ノ後役ニ任セラレ又メトホル
ストノ後役ハジヨン名マルクハム名へ命セ

ラレシヲ聞ケリ

○本月十六日

我四月廿四日

後ハ物價相場ノ報告

ヲ得ス然レ

氏木綿糸并ニサハイ服連ハ他

日價ノ上騰スルヲ待居ルトテ殊ニサワイ

ハ甚タ下直ニシテ買込タル人困却ノ風聞

アリ

○津出シ品物ノ中茶ハ殊ノ外好ミ手多シ然

シ仕来リシ出港物ハ多生糸煙草ナリトゾ

或人ノ書狀

来意ノ趣ニ夏中小艇競駈^{コフ子セリカケ}ノ企コレ有ト實

ニ開齎ノ一トモ相ナリ或ハ適然タラシ然

リト雖社中人少加之小艇モ亦些少ニ属ス

或ハ不可ナランカ余以為ク時々砲發ノ會

ヲ催シテ此ニ換ヘハ如何ン費用モ甚少ク

シテ木の糊紙等モ又聊備ハレリ且ツ地形

ヲ撰ミ東方ノ海濱ヲ以テ之ニ充ツ可シ發

砲期日ノ如キ毎十四日ニ一度ツ、ニテ可

ナラン又費用ヲ減省スルカ為ニ一箇ノ粗

的ヲ用ヒシ此拳ハ實ニ社中而已ナラス恐
クハ看^{ミル}官^{ヒト}モ亦愉快ヲ極ルニ至ラン

近日入港出港船日記

入港ノ分

○第五月十七日サラミス横濱ヨリ着 同日
ロテ子ー全所ヨリ十八日ヘルマレ江戸ヨ
リ

出港ノ分

○第五月十七日ウエレット上海へ出帆 十八

日ヘルマン備後洋へ今日オライクス横濱
同日ウエルケン長崎へ

兵庫大坂ノ通船

○ストンチ^{船名}ナル蒸氣船日々朝八字ニ^我時五
神戸ヨリ大坂へ出帆シ午後五字ニ^我時七
大坂ヨリ亦神戸ニ發ス荷物旅人等運輸ス
可シ

以上

支那國

此歲ノ初メ二月頃ヨリ唐國北京_{地名}ト云
フ処ニ叛逆人アリレトソ其ユヘンヲ尋
ヌルニ元キリシタン宗門ノ徒起ツテ
王命ヲ用イズ妄リニ逆意ヲ企ツルカ
故ニ天子ヨリ或ル大將ニ命シテ之レヲ
伐タシムトイヘル徒黨ノ内ニ外国人四
五人モ交リ助クルト云フ然ルニ_{人名}レイ名ト
云フ大將イデハヨリ克ク之レヲ平ラ

ゲレカドモ殘兵別レテ帝ヘノ糧道ヲ絶チ
專ラ海賊ヲナス_{地名}故_{地名}北京_{地名}之レカタメ
ニ大イニ擾騷スト云フ

集者曰ク舊幕府政權ヲ採ル之
時ニ當ツテ肥前ノ國島原ノ村落
或ルハ長崎ヨリ二里斗リ離レシ
処_{地名}ニ浦上ト名附クル村アリ凡
ニ三千家モ有リト云フ処ナトハキ
リシタン宗門ニ組セシモノ凡ソ合

セテ二十人モ有リシト聞ク夫レニヨッ
テ去年五月コロ尽ク召捕リニナリシ
カドモ如何ナル故カ之レヲ釋ルシ
今ニマダ盛ンナリト我カ宗門ニ皈依ス
ル者ハ皆之レヲ救フノ理ナル故佛人ヨ
リ助ケヲ乞イト云フ然ルニ当節ニ至
リ何ニカ御所置ノタメニ殊ニ御役人
方ノ御配慮トワ實ニ此ノ宗門斗リ
ハ恐ルヲナリ

兵庫新聞

慶應四年歲壬四月三日
標州兵庫
楠公廟前高札之寫

大政更始之折柄表忠之盛典ハ彼為 行天
下之忠臣孝子を勅獎彼 捷勇を褒擢
正之佐中將正成精忠節義共功烈萬世輝
真二千歲之一人臣子之龜鑑云故今般
神号城追諡之社壇造崇祀極度畏念云依
之金千兩 御寄附云云 在事

但正行以下一族者等鞠躬其力其切方
不少服也貴也 按合 祇可有之方也
仰者事

右之通也 仰者能天下有志之者皆傳
所各件 亦能同志親之向之可下之
辰丑四月

兵庫
裁判所

評者曰

上以古へノ忠臣孝子ヲ愛恤提攜シテ寒賤

し多シ難有る事あり昔人云ふれり近
甲名海より故蓋五條ノ道成止ぬ一と云
相勵む所ありと集者流を成て云

○五穀大旱ナキヲ能ハス人間病ナキヲ能ハカ
故今度所一新ニお柄末々天下平定トモ云レサ
ル中ニモ只諸民ヲ助ケテ一ヲ第一ニ思ハコトヨ
リシテ中後按劍林戸ニナイテ病院中ニ立
と提^{アミ子}通^子萬民ノ病ヲ平癒オセト名臣ヲ集メ
玉^子コ^子定^子勢有^子トモナリ去ニヨツテ如何ナレ

果^{イヤシキ}賊者ニモ病^シ来ト有^レハ速ニ去テ療治ヲ願フ^ニ
ト云事ナリ

日病院所^ニ立^テ方ニ就^テハ莫^クテ^ハ所入用ナ^ク天
下有志^シ人ニハ所^ニ寄^リ附^ル以^テ云^フ神^ニお^レ来^ルハ^ハ其
島^ニ志^ス夫^レ出^セト^ノ所^ニ有^ル之^ヲ於^テ後^ニ七日^ノ月^ノ
二冊^ノ出来^ル節^ニあ^リあ^リ記^ス也

關東新聞

日及^リ東^ノ平定^{イタセ}之^ヲ故^ニ鎮撫^セ智^トシ^テ
近^ク之^ヲ條^ニ大^ニ言^フ據^ル出^テ逢^フ相^ニ来^ルト云^フ

戦争風俗

四月^ノ十五日^ニ戦^ハ兵^共野^ニ中^ニ都^ノ宮^ニ標^シシ^テ是^日城^ノ兵^防
防^クア^タワ^ス其^夜已^ニ城^セリ^コ事^止日^明
友^軍人^告来^リ之^ヲ故^ニ直^ニ宿^軍歩^操出^シニ^来リ
小山^ト申^驛ニ^ヨイ^テ戦^ヒ催^ス所^ニ戦^放小^ニテ
宇^都宮^城引^退キ^テ翌^日宇^都宮^義戦^夜軍^大
大^勝利^{アリ}者^夜戦^兵城^中ニ^地雷^火ヲ^伏セ^テ
逃^ル其^夜宿^軍ヨ^リ城^ヲ退^シ入^ル城^ニ其^夜雷^火
火^落シ^テ厚^州兵^中多^ク大^ク火^ニ怪^ル也^ト云^フ

有之由望者 然賊兵日光山に中ストイヘモ、ニモ歩軍
スルヲ可ラスシテ 終ニ會戰ハ遂難ル

一信州路に進ミシ賊兵、後高田道ニテ松代へ進ム
ヲヨ上田松平ヨリ加勢トシテ幸人衆持出ス松代ヨリ
松平ハ道終モ遠カニ馳ル、一ニテ火急ニ人衆ヲ
標知ス、一多クハ六ヶ敷キ皆ナルニ今幸人兵出サレシ
一在モ有ルヘシト礼謝シテ即加勢ニ及バズ去リ以テ
返ス次ニ上田ハ近國ノナカラ僅カ 幸人兵ヲ出ス
ト云フハ只云々伏ノ加勢ニシテタノムニ足ラス賊ト共

ニ討タルベシト令ヲトスカル上田勢驚愕平伏シテ
幸國へ使者ヲ馳シ重テ二百幸人ノ援兵ヲ加
ヘテ以テ賊ヲ數ニ挫シキ賊遂方ヲ失ヒ敗走
スルヲ及ヨリ高田勢追討シテ殊ニ勝利アリ
リシトハ依之コレヲモ皆ナ會城へ逃ケ龍ヶ平
洋ニ曰ク高田勢先ニ一サヘモセス我カ城下ヲ
其後ニ通シ今賊ノ近ルニ及レテ其兵逐討シ
事其意怪ク士道ニ壯ラツトノ風アリ

依之信越乃ヒ冥東ハ平穩ノ由風アリナリ以テ

一、戦争ノ中、戦争ノ手、捕ト云ヘキ者ハ、松代勢ト云フ
ナリ上田勢ノ云フ杯ニテハ、突ニ、陸國ト云ヘシ

元新選組

近藤勇事

大和

右ハ先月武勢ヲイテ、石捕ラレシ、此後、所詮、
ト来リ、曰ハニ、ヲイテ、左ノ山、ク、不置、其、ト

近藤勇事

大和

は、若、又、虎、ミ、罪、有、ミ、此、中、所、持、信、武、勢、山
ニ、ヲ、イ、テ、友、軍、ハ、敵、對、タ、余、大、逆、有、ミ、今、角、を、求
モノ、ク

全四月日

右ハ、前、級、三、條、川、原、ニ、お、あ、り、漂、有、ミ、ク

西園寺、三、氏、中、將、公、三、丹、銘、梅、陣、總、督、ノ、所、依
志、々、々、々、々、々、一、所、ハ、大、江、山、ニ、お、あ、り、

大、江、山、ニ、お、あ、り、白、雲、々、々、々、々、

あつて諸強を以て之を人々

園田忠平

甲州諸藩より城の形勢を

無事届出申上り

老ぬ故のすゝ

良資

伏水より織田を討拂ひ時

平河川に接する所あり

平河

とは思ふところなり

長肥

辰三日

於波府總裁有栖川宮様へ英國公使お招

ひ参上致し侍るに公使参殿途中より

い無禮致したる相忍由所願達あり

辰の廿五夜より建言

僅るなりと云ふ南城市陣定より所願

も是れ在るなりと云ふ所願無効なり

相成る事自れに就きては是れより之

辰の廿五夜より進軍し機會を待たず

英國公使派來身而達劍之有相義以爲彼
之情實不相分相亦多爲之憂 亦獨以作付
以美如可之有爲之能也

宣統三年

甲府近而進軍其有在英國公使所應接
之義志參謀所畫之身中爲所立於此
作爲及有爲之身又彼分以之法之義有之
以下其思之相所所處之新一應法之六身
身以乃其平生之相遠軍中一人其研之義
身其思之身其義身其生以之身其計其地
要害也其不其有身以急達所進軍上其義
以服一日身其義身其思其體其言

辰三月

尾張大細言

心其前守相

池田信隆守

龜井隆政守

稻田水部守

甲戌我軍も社中と結ひ日本府内此
 際変ハ文ありすゆへきししハ御
 前より先世の人く一老らせんた先なり
 まれとあらひはもき一先とてころハおを
 一はのき一や44移のま、お救せしを
 けのちよりハひらふふとゆてとゆと
 ともよみえせん事と社中一口の需
 志とせん云

十七日追補
 木挽与吉ト中老一珍事出来セリ
 斧ヲ以テ切り付ケシハ其以木挽イカ
 ホドリ働クトモ終ニ金子ヲ渡サゲルガ故或ハ
 怠りニ老ト見ユル人ヨリ外ノ木挽傭
 ヒシニ余程働キシト力云折ヘナリ歩コラ
 右木挽草人ノ方行キケルユ斧ヲ指シテ鍋
 シケル友モ坐ヲ立チ込ニ斧ヲ左半死半生
 ヘ歩込ニ主テ頭上へ歩込ニ斧ヲ左半死半生
 ノみ新然ルニ木挽モ坐ヨリ出スト云
 テ今ニ探索ノ内人ハ平生兇惡無道ニシテ
 評曰元來忒蒙人ハ平
 本國ノ人スラ悪ム終
 ノ氣質ニテ堪ルヲザル西ヨリ茲場
 二至り者乎

閏四月廿四日

內外新聞

第二

第七日目每三出板知新館

神戸新聞 第五月廿三日

我 壬戌月朔日

英國ス子ラー名船ノ著シテ支那國ニ在ル友

人ヨリ左ノ事件ヲ告來レリ今日ハ英國女

王ノ誕生タシシヨウ日ナルニ悲カナシムヘキ新聞ヲ得タリ

上海名地ニアルオーストリヤ名地ノ殖民シヨクドモ

彼國ノ太子ノ殺害セラレシヲ聞ケリ此太

子曾カッテ国民ノ移往スミヲ見物ノ爲メ恐怖シナ

ガラ上海江來リシ人ナリトツ又アイルラ

ンド名地ノ惡黨共至當ノ刑ヲ受ケシヨシ

今日ドーカラスニテ次ノ新聞ヲ得タリエ
デンボルクニ在ル英國ノ太子ヲセド子一
名^地ノ近辺ナルコロントナルフト云フ所ニテ
殺害セントノ企アリシト

又政府ノ傳信機ニテ次ノ新耳ヲ得タリ尚
委シキ事ハ今晚ニ至テ知ラルベシ右ニ記
セシ英太子コロントナルフト消遙セシ折一
人ノ乞食鳥銃ヲ以テ太子ヲ發射セシニ此
玉背^{セナ}ニ中リ^{フキホ子}脇骨ヲ經テ終ニ胃臟^{イジウ}ノ外ニ落

着ケリ未タ此玉ヲ脱ク事能ハス患者甚タ
痛ミヲ覺フ然カシ^シ医宦ハ未死生ヲ弁セズ
ト

夕七時半ノ報告ノ趣ニテハ英太子ノ痛ミ
未タ甚タシトイヘドモ漸治療ノ効アリシ
ト再ヒ第五月十二日^{我四月十八日}附ノ報文ニテ
次ノ事件ヲ聞得タリ英太子ノ腹中ニアリ
シ銃玉格別ノ痛ミナクシテ脱出シ得タリ
後子漸快氣シテ再ヒ公務ヲ司^ルニ至レリト

佛軍艦ドブリークス船將ヨリ告文

先日船將ボルロツク^名人淺深ヲ測量セシ後
モ大坂川口ノ流勢漸相變シ且堰ニ於テ居
留地ヲ撰ム儀ニ付而ハ彼是議論不穩次第
モ有之依之先達而堰ノ港内ヲ側リシ通り
天保山ヨリ川口之船路ヲ能吟味シ此ヲ大
坂兵庫在留ノ人々江心得サセ候ハガ可然
ト存候在留ノ人々此儀ヲ希望スルニ至ラ
シノニ力爲メ此一通ヲ大坂兵庫ノ役所ニ

指置ント存候此談事ニ就而ハ^{タト}仮令一句ノ
余モ無難ニシテ經過スト雖忽チ又危難ヲ
生スルニ至ルヘキヲ人々江説得スヘキ事
過日軍艦トブリークス^名船數日天保山ニ碇
泊セシニ數多ノ日本船ノ此辺ニテ難ニ逢
シヲ見タリ其時人民ノ溺^ネレシヲ知レリ
今日正九ツ時^ア米^メ国^コ軍艦オナイダ^名船中帆柱
ニゼオルジ^名人ノ旗ヲ揚テ凡四分時ノアイ
ダ大砲廿一發シテ英國女王ノ誕生日ヲ祝セ

リ英ノコンシユル館ハ勿論米國コンシユ
ル館其余居留地方ニ且港中碇泊ノ船亦
尽ク祝旗ヲ揚タリ英國ノ政ヲ執ル人々ハ
今日女王誕生日ニ就テ益國威ヲ輝シコト
ヲ欲ルナルベシ

今朝英國軍鑑セルペント船著シ第三月十
三日附ノ本國ヨリノ書翰且本月廿一日附
ノ横濱ヨリノ書翰ヲ持來レリ
横濱ヨリノ新耳ハ江戸ニ於テ強勢ナル會

津取沙汰ノ外他事ナシトソ

先日或人ヨリ書面ヲ以テ小舟競セリ乗ノ儀ヲ
企シト雖ライフル競セリ發ノ儀ヲ一紡同意セ
リ當地ノ穩カナラサルニ就而ハ我々一同
常ニ砲器ヲ所持スルヲ管要ト存ス佐其術
ヲ知ラサレハ忽不用ニ附スベシ其修業方
ニ就而ハ夕刻暇ノ時ヲ得テ談シナハ暫シ
ニシテ得ラルベシ然ル上ハ大ナル快樂ノ
一器トモナルベシ

當地水害甚シクシテ大雨ノ爲ニ墓地^{ハカシヨ}近傍ノ砂土ヲ流シ込力故ニ政府ニ於テ木石ノ類ヲ以テ段ヲ築キ居留地東方ニ有川ヲ堰セントノ企アル由ヲ或人ヨリ聞ケリ此儀ハ甚タ大切ノ事ニシテ速ニ是ヲ取行ンコトヲ願フ所ナリ若シ猶豫シテ雨降りノ時ニ至ラハ暴雨ノ爲ニ墓地ヲアバカレ近頃葬リシ死体ヲ衆人ニ^{サラ}瀑スニ至ランカト甚タ心痛セリ

昨廿二日夕五時半頃ヨリ^{ケイキリウ}輕氣球ヲ揚ケタリ當地ノ人々甚タ是ヲ驚キ感セリ然ルニ惜イカナ夜迄持チ堪ヘザリシヲ

入港物

此頃次第減セリ來ル九十月頃迄ハ格別盛ニ成ル間ジク毛織^{ケアリ}物類縮緬^{チリメン}類ホヲ好ハ大ニ減セリト云ベシ併シ可ナリニ賣レル物ハ黒サワイ。毛織ヘンシイ。トルコ赤木綿并木綿系ナリ此木綿系ハ好ム人モ有リ又價

モ上レリ鼠色木綿ハ此頃日本人ノ向ニハ
悪シケレトモ外國人ハ米因飛脚船コスタ
リカノ風耳ニテ三トル余ノ價ニテ買入シ

出港物相庭

生糸 百斤ニ付價

奥州中品 四百三拾兩ヨリ四百四十兩迄

同上品 五百兩ヨリ五百廿兩迄

飯田上品 六百兩ヨリ六百十兩迄

越前 五百兩ヨリ五百廿兩迄

第五月廿三日

我壬月朔日

迄ニ出港セシ高凡

二百箇斗

茶

横濱ニテ買込タル共上中下三等併セ凡四
万斤斗次第時候切迫セシ故外國人古茶ヲ
困マントスルノ趣アリ

新茶ハ先ツ第六月中旬トノ見込也

百斤ニ付價

並茶 拾兩ヨリ拾兩二步迄

中茶 拾七兩ヨリ拾七兩二步迄

上茶 廿二兩ヨリ廿三兩迄

右下茶ハ當時大二直下リセリ新茶ノ極下

茶ハ當時賣物ニ有ト雖價高ケレハ未買入

人ナシ

生蠟

百斤ニ付十二兩一步ヨリ十二兩三步迄ノ

價ニテ凡二万斤斗買込タリ當時未夕買入

サル僅ノ生蠟アリ

冥東ヨリ此手残 先月廿四日

此サニハ賊徒押領シ宇都宮城攻撃ノた免士

生城ヨリ朝六ツ半時六番隊并大砲三挺臼砲

短カキ二挺大山弥助指引にて且怪ニ隊右江

指添發軍引續き大垣藩一中隊大砲一挺兩

藩都合二百人にて進軍致ハ所四ツ時分宇

都宮城邊はて押浩多純ニハ賊兵防禦之ニ劣

左ニ城下町江陸臺場築立大砲一門並小銃

隊にて防戦致ハ得共間ホク攻落シ城際ま

て押寄せハツ時頃内外に砲戦嚴く手負死
人別紙に通りには、此の如く敵方に五千五
百人余も有之、不容易搦搦、然るに、遂に、
至り、賊兵裏道より操出し、最初乗落せし、
塹場江乗入り、壬生より、返り路を絶別して
苦戦一同相働、右に通り、賊兵後を、切り切
り、以て、分隊位宛差出し、戦争い、こし、以て、
弾藥兵糧、少にお成り、且運送し、路を、絶
陳て、こ、不、お、満、ゆ、故、一、端、繰、引、以、た、し、
兩藩共

引揚げ、所口、に、塹場、賊兵相固、免居、以、を、散、々、
お、破、り、お、偽、居、以、折、柄、五、番、小、隊、在、長、州、一、中、
隊、大、垣、も、同、断、に、て、本、街、道、より、急、陳、即、刻、仕、
寄、せ、發、砲、お、始、む、然、所、因、州、藩、一、中、隊、に、て、壬、
生、城、より、急、援、と、し、て、急、陳、返、路、相、開、き、夫、よ、
り、一、度、押、詰、免、終、に、七、ッ、半、時、分、落、城、大、勝、利、
に、お、成、賊、徒、歩、取、百、人、余、手、負、二、百、人、余、と、お、
兄、へ、以、得、共、未、取、り、調、出、来、苗、以、付、逐、々、申、越、
以、趣、に、て、汝、以、右、に、つ、き、お、残、我、死、人、數、を、發、

發^{パツ}おも^モ岩城^{イワキ}以^レ御國^{ミクニ}許^リ江^エを^レ指出^{シテ}以^テ儀^儀何^何分^分以^以
永^永計^計居^居下^下交^交亡^亡我^我死^死之^之墓^墓所^所之^之義^義之^之当^当城^城下^下に^に
報^報恩^恩寺^寺之^之中^中寺^寺へ^へ取^取り^りき^きを^を免^免置^置以^以右^右形^形行^行申^申
上^上以^以上^上

五番隊

戦死

上田友輔

手負

美代藤之丞

川崎兵十郎

大廻新八郎

河野伊兵衛

六番隊

戦死

川北六左衛門

戦死

岩城平右衛門

永山寛太郎

西田要之丞

加納次左衛門

伊地知助五郎

築地宗二郎

岩切彦二郎

松井左兵衛

佐藤茂五郎

鵜木吉二郎

同隊手負

野澤七次

杣^ノ龍^{リウ}右衛門

上原八郎

菱^{シロ}刈^キ七^{シチ}之^ノ助^{スケ}

有川陽之助

横山勇藏

縁先喜之助

平成彦右衛門

山下喜之助

伊集院小藤二

同隊深手

廻深五左衛門

鎌田喜之助

松元清右衛門

安田仲右衛門

伊藤正二郎

宇岩彦之丞

日高郷右衛門

矢野八二郎

川上彦八郎

且輕隊

戰死

井上伊右衛門

戰死

内藤金二

手負

宇都宮岩太郎

本宮手負

鳥津式部

有馬藤太

種子田左門

外僕一人

右時。宇都宮報知如此以出以

四月廿八日関東よりし手紙之写

前略江戸夫ハ賊徒鎮撫ニ相成候得共官軍
著前ニ逃去リ候徳會之賊徒并ニ新撰組ト
唱ヘ候浪士江戸ヲ脱走シテ野州宇都宮并
ニ結城壬生近國所々ヲ押領致居クニ付宇
都宮應援トシテ茂根藩差越候処初メ流山
ト申所ニ浪士都合二百人余伏勢有之候ニ
依テ及戦候所賊徒近藤勇致降伏器械亦モ
取揚ケ勝ニ乘テ宇都宮マテ押寄セ居候処
賊徒ヨリ狡步ニ出逢ヒ大ニ敗走致味方死

人數多有之候然ル所因州土州應援トシテ
向イ候所壬生ニテ賊ト相戦イシニ是モ同
ク狡步ニ逢ヒ敗走ニテ彈藥亦モ賊手ニ取
ラレ死人モ數多御座候時ニ長州藩一小隊
大垣藩二十人余薩州五番小隊共一ツト成
應援トシテ出陣ス去ル日野州ノ内岩井
村ト申処ニテ賊兵七百人余ト出合相戦候
処官軍亦勝步取首三十余級大砲三挺小銃
數多騎馬三疋右分取ニ洩流以然ル処去ル

廿三日岩井村之殘徒五百人余千住ト申宿^{シタ}
マテ押寄セ^ル付佐戸原一小隊薩州一小
隊早速繰^{くり}出シ^ル所降伏^{ゴウブツ}之ノ心ニテ敵セザ
ルガ故ニ應接ニ及^ル処弥降伏イタシ候ニ
付所持ノ大小砲數多^{アマタ}騎馬三足鎗四十本斗
り取上ケ右ノ内二百人余ハ佐戸原預リニ
相成外三百人余ハ備前藩関係ニ相成申^ル
薩藩六番一小隊大垣藩一小隊又々宇都宮
江押寄^ル

右戰ノ次第入江以來ヨリ今日迄ノ所置荒
々涉^ル報知如此御座^ル以上

月日

中村某

右月人ヨリ或^ル友人ノ方江贈リシ書状ノ
写ナリ近頃妄^{ボウ}說^{セツ}流行ニ付此實正ノ手紙
ヲ以テ衆人ノ疑惑^{ウタガハシ}ヲ情サ^ル爲^ルナリ他
日諸君實正ノ事ヲ得玉ハダ速力ニ知新
館^{ニテ}御報知^{シテ}ヲ希フ直チニ彫刻シテ萬民
安堵ノ一助トセン

先ニ彦根軍門江降伏セシ板倉父子ヲ下總
結城ノ城中ニ於テ斬首セシトノ風評也
過日秋田侯ヨリ羽州庄内江使者ヲ指向ケ
討會ノ論ヲ立テシニ庄内ニ於ハ會ヲ討ツ
ヘキユヘンナシト答フ依テ當時秋田侯ニ
千三百人余ノ兵ヲ以テ庄内入口島海山ト
云処迄押詰ノラレシ夫レニヨツテ羽州龜
田岩城左京太夫殿日本庄六郷兵庫頭殿共
其勢合セテ三千人斗出張ストノ風評

大坂ノ新聞

○本月十七日薩島鳳瑞丸ト云フ軍船ニテ大
監察使トシテ三條大納言殿副トシテ萬里
小路辨殿東下セラレシ陪從ニハ西郷吉之
助林玖十郎小笠原唯ハ江藤新平等十リ守
衛トシテ阿州之兵二百人斗御供十リト云
○曰幕府ヨリ亞国江注文ニナリシ鯨船ハ已
ニ先頃横濱ニ着シタルヨシ今度三條殿御
下向ノ上右船御取入レニ成筈ノヨシ

○大坂鎮臺醍醐大納言殿兵庫江御下向アリ
シ乃千岩下佐次右衛門陪從セント云フ

○今度大坂運上処ニテ大坂ト横濱トノ間ヲ
通行スル飛脚船浪花丸ヲ取立ラレタリ乗
組人ハ多分英人之由云フ取締シテ薩藩肥
後七左エ門ト云人衆組ヲ命ゼラレ來世五
六日ニハ兵糧米千石余モ積デ江戸江下ル
由便船トシテ外國事務判事大隈八太郎并
海軍先鋒參謀島團右エ門トカ云人モ東下

スト云フナリ

右ノ飛脚船へ便船ヲ願フカ又ハ荷物ノ
運送ヲ願フ人有ラバ川口運上所カ或ハ
内平野町松屋町江戸屋平右エ門津国屋重右エ門津国兩家ノ
者江申出セトノ事ナリ

告文

由良彌太二

私儀大坂御運上所ノ傍ラニテ借馬屋ヲ始
以ニ付各々様御用被仰下度尤馬具儀ハ和
洋共相備居候間御好ミニ應シ可申且馬賣

買毛仕候条此段布告仕候以上

知新館告文

此社中ニ旌テハ珍事并ニ諸相庭物ホヲ記
スノ本意也又館外ノ人タリ凡功能有事ヲ
衆人ニ示サンカ或ハ書籍ホヲ彫刻セント
欲セラル、モ此社中へ御示談アラバ速
力ニ發擇可致候者也

以上

慶應四年戊辰五月朔日



內外新聞

第三

第七日目每二出板

知新館

神戸新聞

第五月廿三日
我壬月朔日

今日ハ英國女王ノ誕生日ナリ本國ニ於テハ諸人如何ナ
ル愉快ヲ盡シテ賀祝スルヤ例年期日ニハ上下一統兒童
ノ如ク滑稽ケテ之ヲ賀セリ又夕景ニ至レハ老幼ノ別ナ
ク郊外ヘ出テ快樂ヲ極ムルナルベシト彼是想像セリ
第千八百卅七年女王即位ノ後ハ能ク民ノ心ヲ取り能ク
國政ニ心ヲ用ヒラレタリ或日女王自ラセキセコボルク及ヒ
ゴサ^{地名}ノ太子アルベルト^{人名}ヲ賀トシテ以テ婚姻セントノ企
ヲ布告セシキ國人太々安堵ノ思ヒヲナシ大ニ是ヲ觀ベリ
此婚ヲ結ヒシ後ハアルベルトノ盛名漸々四方ヘ雷鳴セリ

公自ラ諸術ニ達セルカ故ニ是ヲ國民ニ教示スルノ權ヲ取
レリ又窮民ヲ惠メント欲シ第千八百五十年ニ自ラ費用
ヲ調シテ府中ニ在ル貧民救テ任メシムルノ大室ヲ營メ
リ又千八百五十一年ノ博覧會ハ公ノ企ニ出タリ又千八百六
十二年ノ再度ノ博覧會ニハ公大ニ利益ヲ得タリ
女王ノ日記ヲ閱スルニ婚ヲ結ヒシ後ハ總テ幸福多カリシト
公在世中敢テ政事ノ一派ニモ係ラスト虽モ常ニ政府ニ
就テ女王ト國事ヲ謀レリ嗚呼公ノ死スル實ニ國家ノ為
メ惜ムヘキノ機ニシテ女王ニ於テモ大ナル不幸ニシテ愁
傷亦云ヘカラス後女王鬱々トシテ不豫故ニ種々ノ流言

巷中ニ偏子シ然トイヘドモ近來ノ報告ニテ之ヲ見ルニ漸
ニ女王快氣シ客殿ニ出テ客ヲ延見スルノ由ヲ知り大ニ歡
喜ノ思ヲナス是ニ基キテ萬更前日ニ復スルヲ願フ所
ナリ

爰ニ於テ女王ノ功德ヲ贊美スルニ公ヲ以テ是ヲ賞セハ能ク
國王ノ任ニ當レリ又私ニ是ヲ賞セハ貞節ノ婦人ト云ベシ
故賀アルベルトノ後嗣ハ當年北七才ナリ此公モ亦
父ノ如ク才幹ヲ以テ天下ニ有名ナランヲ願フ如ナリ此公
第千八百六十三年ニデ子ナルカ國王ノ女アレキサンドラ名ヲ
娶レリ此女モ亦容兒美ニシテ生レ付秀才ナリ女王死去

ノ後ハ後嗣トナル可キノ賢女ナリト

方今太子アルフレットハガラテート云船ニテ日本并ニ支那
ヘノ旅中ナル可シ余等當港ニテ太子ニ遭遇ス可キヲ恐
ル

當時全權公使ハルリーパークス名海軍副總督ヘシリケツ
ベルハ大坂ニ在留ナリ此時ニ當リテ軍艦尽ク當港ニ在
ラス女王ノ誕生日ニ當リテ責メテ一隻ノ船アラハト思
フ併只女王ノ國民ニ慈悲アル難有テ想像スルナリ

神戸新聞

西洋第六月十日
我閏四月十九日

昨夕我壬四月十九日藝州侯小舟ニ乗リ外二艘ノ小舟
疑フラクハ或ト共ニ大坂ヨリ来リ居留地ヲ距ル一
小大名ナラン
五十間ノ処ニシテ行列ヲ整ヘ米國コンシユル館ニデ
来レリ

先日中野シク當港所々ノ揚場ヘ運ヒ来レリ是ハ
定メニボントヲ造営スルノ用ナルベシ

大坂ヨリ出帆シタル多クノ軍艦ハ未タ北方ヨリ飯
サリキ
解曰洋人ヨリ官軍ヲ南方ト
唱ハ賊軍ヲ北方ト唱フ以下同之

先日疾ヲ受ケシフライナル者ハ次第ニ快氣ノ由ニ

併シ未タ傷ミハ強ク寒熱アルトナリ瘕ヲ付シ日本
人ハ今ニ行衛知レズト雖^{トリテ}捕人ノ者頻リニ探索ス
ル赴^{トガシ}ニテ犯人ノ母ト妻ハ既ニ囚^{トラハ}レト成レリ
犯人ノハ第一ニ出セリ

横濱ヨリ左ノ新聞ヲ得タリ

江戸城ハ再ヒ北方ノ手ニ入リシト且又横濱新聞ニ
委シク記シタリシ先般東下アリシ勅使某モ既ニ害
セラル由又遠カラズシテ京都近傍ニ於テ再ヒ戦事起
ルベシ會兵ノ漸々ニ近ツクニ依テ豫メ備ヘヲセル趣
ニテハ斯クアランヲ信用セリ

ス子ラー^{各船}ナル小軍艦ハ第六月八日^{我岡四月十七日}大坂

ヨリ来リ昨夕出帆セリ

本月六日ノ後ハ價ヲ知ルベキ報告ヲ得ズ入港ノ品
物ハ價高キガ故ニ日本ノ商人嫌フテ買ハズ又出港
モノハ生糸ト茶ノミ商ヒアリ

或報告ニ依テ次ノ事件ヲ聞得タリ

過日英太子アルフレット^{各人}ヲ殺害セント謀リシオ
ーレル^{各人}ハ既ニ死刑ニ處セラレシト

アビッシニー國ノ征伐モ既ニ終リ當時英兵凱陣ノ
途上ナリ然ルニ生捕^{イナドリ}千余ヲ引^{イニツ}卒スルヲニ就
キ^カ變動ヲ生セシ歟未タ歸國セズ

或ル報告ヨリ尤ノ事件ヲ拔萃セリ

龍動^{名地}第四月十五日バロック^{名人}ノ話ノ趣ニテハアビ

ニ^{ワボク}國王和義ヲ乞ヒシトモ又再ヒ復讐ノ兵ヲ起
ストノ信シガタキ風説アリ

第四月廿日ウオルス^{名國}ノ英太子アルフレット夫婦共
ニドフリ^{名地}ン到着アリシト

此前日太子ナイト^{名地}館ノ官ニ任セシト

第四月廿二日英國トオーストリヤト通商ノ條約ヲ
取替セリヘニン人二人捕ヘラレシ^{名地}是疑フラクハボ
キン^{名地}ハム^{名地}ノ宮室ヲ燒ントノ企ニ依テナルベシ

神戸病院

第一卷ニ記ス^{名地}如ク病院のタハ已ニ趣旨と立られ
たり乃ち左の如^{名地}

病院購金録

神戸 外國事務役所 判

病院ハ人命を保助^{名地}人種と蕃培^{名地}貧民の病て医業
と得ざる者と救助とる道ありハ國家ニ欠べ^{名地}る
要務なり今茲ニ神戸ニ於て官許と請け一院と設け
貴賤の區別あり有病の者ハ来て治療と得^{名地}るめ貧
民ニ医業と施^{名地}聊救助の一端とせんと欲^{名地}我

と志と同等者不問多少納金うゝ人々と希望
する者なり

病院御用掛

森 龍玄

辰四月

遠藤 謹助

前書に通りあるは若し有志の人ありは神戸運上所を
或ハ大坂北江戸堀一丁目會所神戸外國事務掛出張
所陸奥陽之助方と持参する事なり

醍醐大納言殿有馬へ御出途之事

神戸警衛柳川侯の跡津山侯より警固なり

四月六日関東風聞

一徳川氏慶四月十日水戸へ發途の由りて供方左之通

梅澤弥三郎

遊 撃 隊

精 銳 隊

此度被仰渡候箇條の内城内住居の家臣廓外へ出
づるに招 御沙汰に付此度参謀へ御聞合相成候如
全く曲輪中而已りて半藏御門より櫻田馬場先和
田倉内平川御門を去るべき度なり其余御構ひ
無之由

一靜寛院宮様天障院様の増上寺へ御開きの支となり
其余婦人方も右ふ準し申へきとの支なり
一軍器引渡の支の目録を以て督府へ御渡し相成り
品々其供成り有る由

一北陸道より進み官軍へ四月二日浅草東本願寺へ
繰込成り知寺内手控りて滞留ありし同
六日同如西福寺へ引移り成り趣なり

但し本願寺本陣の惣勢千二百人余と云

一肥前の兵隊の糧米塩味噌十分の由なり

一肥後の兵隊の四月三日白銀の邸へ着て惣勢凡五百

人程あり内三分の一ハ甲州路へ發行の趣且つ役々の
名前なり記を

惣督 清水数馬 目附 財津源之丞

勘定奉行 浅井新九郎

勘定方頭取 才士弥一郎

勘定方 水谷才助 物書 大森吉之助

一藤堂家人数五百人余乃ち左記を

惣師 藤堂仁右衛門 副師 藤堂隼人

謀師 藤堂監物 番頭者頭百廿人

司令炮手 三十九人 乗馬 七足

兵糧者頭 三百八十人 砲馬 四足

四月三日肥後勢八百人計り千住へ着内四百人計
へ士分して罷城本込銃兵として兵勢壯なり
と云其外藝州二百人若州四百人と聞ゆ

水戸より奥州若松迄先觸馬

人足二百二十人 馬九疋

右ハ水戸殿家来市川三左衛門佐藤図書朝比奈弥
太郎等年来奸惡ノ所業有之今般依 朝余嚴罰
可申付候如多人数引連奥州會津筋へ脱走ノ趣相
聞候二月右為追捕水戸殿人数千二百人余罷越候

余前書人馬無遲滯差出可申候以上

月日

水戸殿 目附方

常州徳田より

奥州若松迄驛々問屋中

一水戸家々来鈴木石見の儀ハ江戸市中にて酒賣
成りて居しを官軍へ召捕なり千住と云所にて
獄門に仰付らる也

羽州の風聞

一當時秋田侯の領分より庄内征討のより津輕南部仙
臺米澤其外亀田本庄等の藩元々九家の兵隊屯

集せりと聞ゆ

一仙臺并薩長の兵船ハ庄内の沖ニ碇泊^{テイボク}せりと云々又な
きとも此より未と詳あり

四月廿五日秋田の軍勢庄内を征せんと最上川^{モカミ}の岸
より兵隊を進む庄内よりも之を拒うんとあ謀師
松平権十郎は命じて同く川岸へ出張して空
く對陣せり秋田の謀師淡江内膳急に一計を廻し
樹木ニ旗を縛り関^{セキ}の声を發後軍の大勢加つた
る如くは見え勢となりて日の暮るを待つ庄内勢
ハ頗^{シバ}る小兵を増し川端と守る先^{サキ}は倍を淡江

内膳敵の動靜を察し其後を襲ひ一舉に庄
内を取らんと兵隊を分り閑道^{カンダウ}を回し峻難^{ジュンナン}をわたり
て進みし路^{ミチ}程遠く且峻^{ツル}なるが故に行軍意は任
せられ半途より曉に至り故庄内の陣も其謀
略^{リョク}と知り兵を割きこれを迎ふとせしより淡江
は軍策圖^{グンサツズ}を外せりと此策内膳が計し如く行ひ
ぬるに庄内を取る支掌^{シサウ}と反その易きありとを
遺憾^{イカン}の至りなりと聞ゆ

一庄内の領地六万石計りの地ハ既ニ縮めしりと云るなり
又同領酒田と云ふ地ハ商人婦人等々何方へ行や

船路卅里と云又米山峠ハ越後頸城郡刈羽郡の境ニ
し高田の東北長岡興板への半途よりて柏寄の
南方ニ當ると云

神戸新軍序

櫻雲主人曰近來外國人ヨリ種々ノ珍説新聞
ヲ神戸長崎横濱函館ノ間ニ傳觸スルハ畢竟臨
時ニ器械貨物ヲ賣沽シテ此舉ニ乘シ大利ヲ
射ランヲ喝希シテ然ルナリ右ノ件々ノ説モ
信ズルニ足ラズト雖モ今茲ニ出セルハ尚此上ニモ妄
説狂言ヲ諸方ヨリ拾ヒ集メ取捨斟酌シテ讀者
ノ為メニ知見ヲ開カント欲ス識者幸ニ了解セヨ

慶應四年戊辰五月八日

內外新聞 第四

七日目毎出版 知新館

神戶新聞ノ譯

○先頃米國帆船前商船デスパツチ船主ジョンス人
ト日本運上所船改ノ士官共トノ際ニ起リシ事件ニ付
先月廿九日裁斷アリシ訳ハ過日出版セシ新聞紙上ニ
告知セリ

船改士官共免狀無キ荷物ヲ取押ヘルタメニコンシユル
外國商正ノ官各ヘ届ケズシテ彼ノデスパツチ船ヘ押テ行シコトハ
米國ノ國旗ヘ對シ不敬ニ當ルト云フヲ米國コンシユル
ノ云立シニヨリ奉行伊藤俊助ノ命ヲ以テ右ノ士官共

ヲデスハツチ船へ差越タリ

右ノ如キ事件ハ西洋文明各國ニ於テハ甚ダ不法ノ事

ニテ有ルトソ

然ルニ船主ジョンスヨリ無テ申立シ同人配下ノ乗組水主

等ノ損失償金トシテ洋銀三万枚ヲ請取ント望ミシ

ハ右裁判ノ時ニハ如何ノ所置ニ相ナリシヤ更ニ知レズ

此償金ノ儀ニ付テハ横濱裁判所ニ於テ如何所置アル

ベクヤ計リ難シトイヘド和聖東地府ノ裁断所ニ飯リテ

申立トイヘド又如何トモ成リ難キ更ナリ

○太政御一新ノ後ハ徳川御征討ノ事ニ付テハ種々ノ

珍事多シ此事ハ度々我等カ會合ノ時ニ當ツテ一奇

話トモナルベシ

○過月ヨリノ政事ハ總テ國中ヲ利スルノ外ハ他事ナ

ク日本ヲシテ西東洋大東洋大西洋ノ各國ト推ヨ等ウス

ル事ノ存念ナリ且ツ國民ヲ開化セシメ給ク外國ノ事

情ヲ知ラシメ我等初メテ日本へ来リシ時ヨリノ旧

弊ヲ改革セントノ企

○過日ヨリ交際ノ二至テハ我が英國ニ深切ヲ尽ス

而巳ナラズ且各國ニモ益信情ヲ以テ交レリ

○當月二日 我閏四月十一日 西洋第六月二日 ヘルマン船ノ到着ニヨツテ或ル新

聞ヲ得タリ此事イヨク實ナラバ我々カ願ヒノ如ク成
ルベシ

譯者云此ノ事件イマタ詳カナラズ後日^{ニキセン}的然ノ新聞ヲ
得ルヲアラハ其子細ヲ告知スベシ

○先月中浪士二人市中ニ潜伏シ居ル由諸藩邸^{ハシニテ}へ布告アリ
此者共ハ旧幕府ニテ身柄ノ者ニテ有シカ今零落スル
トイヘモ萬一諸侯ヘ對シ遺恨ヲ晴スマジキモノニモアラズ

因茲本月第一日

我五月十日 居留地 外国人ヨリ 入口毎ニ警告

固番所ヲ建テ無用ノ者ハ一切ニ入ルヲナラズ夫故西三

日ハ遊參見物人等足迄ノ様ニ来ルヲ得ザリシ

此警告固ノ番所ヲ建シ事日本人ハ諸人ヲ攘リニ入レス

為ナリト云ヘモ我々英ノ推考ニテハ右ノ浪士ヲ防ダ為

ニ設ケシモノナラン諸人ヲ攘リニ入レヌ為ナラハ番所毎ニ

番人一個ヅニテ十分ナルベシ

譯者按ズルニ此二人ノ浪士ト云ハ水戸脱走ノ内鈴木
朝比奈等ヲ探索ノ布令ナルベシ外國人ハ先年品

川東漸寺ノ憂^{ヘン}夏ナトヲ思ヒ出テ斯ク云ナラン

○本月^{當月}第二日ノ事ニテ有^サシ士一人^{キヨリウチ}居留地^{ハイツク}ヲ徘徊^{ハイツク}

セシ或^ル外國人ニ突^{ツキ}當^{アタ}リ直^{ジキ}ニ腰^{カタナ}刀ヲ拔^{ヌキ}掛^ケタリ外國人モ

短銃^{ボストル}ヲ出シ^チ現^チヒシカバ士ハ逃^ニ去^{サリ}タリ外國人モ發^{ホウ}發^{ハツ}ニハ

及^ツバス跡^{アト}ヲ追^{オヒ}テ間^マ近^{チカ}キ番所ニ至^イリ此次第ヲ報^{ホウ}知^チセリ終^{ハツ}

二三間^{距離}ノ處ニテ起^オリシ夏ナレ^レモ番人共ハ一向知^{イッカウ}ラザ

リシ如此夏^イ出来^イセハ已^イ後^ゴハ西洋人短銃ヲ持^ヒタズシテ外^ク出^デ

ハ決^カシテナス^マジ二三度モ皮^カ様^{ヤウ}ノ士ヲ打^ウ當^チタラバ少^オシハ止^ト

フモアラン乎

兵庫新聞

○アデイリヤン^{アデイリヤン}臥^マ崎^{サキ}社^{シャ}の蒸^{モリ}氣^キ船^{セン}ラーサカ^{ラーサカ}船^{セン}閏四月^{ニハツキ}廿

四日午前十一^{のう}字^マ西洋ノ時刻^{セキコク}ニ^ニ来^キ港^{トウ}セリ此船ハ肥前^{ヘン}侯^{コウ}鍋^カ

より雇^ヒひ^ニたり士^シ官^{カン}等^{トウ}兵^{ヘイ}卒^{ソツ}凡^{ソドモ}五百人^{イハヒト}并^{ナニ}乗^{ノリ}組^{グミ}たり

迎^{ムカ}横^{ヨコ}濱^{ハマ}へ出^デル^ルの由^ユ

大坂之新聞

○此度

朝廷^{テウテイ}に於^オて浪^{ナミ}死^シ九^クと^トハ^ハ津^ツ船^{セン}出^デ来^キセリ^ニハ^ハ第二^{ダイニ}編^{ヘン}

と布^フ告^{コウ}セリ^ニ如^ニく江^エ戸^コ通^{ツウ}船^{セン}の便^{ベン}利^リと^トモ^モ於^オて^ニ江^エ戸^コ船^{セン}を

如圖又色なり

日本全國の人知すんばなり

からげの事なり

黄	白	青
黒		赤

○大坂生玉の社地は真言宗の寺十坊あり五月二
 日急ぎ退く被仰付即日佛具并道具亦引取
 疊建具は其儘に捲置去り由之
 此事件は今般御一新く折柄高野ふく僧侶
 韓命と彼是とや立し又依く彼宗徒はよくよく通り

ちとばし耳也

○南都興福寺は是とい寺中三十坊あり二万石中
 の寺外をうぐけ変一坊二十石とすう都合
 三百石と減ぜられし由也

○閏四月下旬よりの霖雨く浪川筋殊く外の満水
 くる五月朔日より南地より上京の船三艘も覆れり
 其内一艘は船子を人幸うじり助に余は及く溺死せる
 由外の二艘は衆徒一人は多か助りしと軍中
 ○危ヶ崎より大坂の通船一艘これより浪出水の為二艘

余程死人ありと云

洋行せー^{トウキョウ} 經業師寅吉の^{ウチノ} 風聞^{フウブン}

○早竹寅吉事ハ昨丁卯年外國人ニ雇^{ヤロム}を家族大衆
と連^{つぎ}て横濱と出帆^{しゅつぽん}一追々各國を廻^{まわ}り同年の暮頃^{くふら}と
亞國^{あつく}サンフランスコ^{サンフランスコ}各^カ地^チへ名^な一夫^{いちふ}より他の國へ渡らんとする
時^{トキ}元方^{もとがた}初^{はつ}寅吉を雇^{やろむ}ひの外人の曰^{いは}く家族大衆打^{うち}た放^{はな}
雜費^{ざふぎ}少^{すく}くば只兩三人と連^づきて余ハ日本へ送り返^{かへ}さん
と寅吉言^{こと}くくく元来本^{もと}ふは控^{かへ}て家族^{かぞ}を引^ひ連^づき
約^{やく}を定^{さだ}め今更^{さら}約と變^{かへ}りて當^{あた}惑^{まど}るるなり

い返^{へん}答^たは依^よて外人も然^{しか}く居^ゐるくくく重^{おも}く出帆^{しゅつぽん}
の時^{トキ}い^い仕^しるくや寅吉及び要^{よう}用^{よう}の人而^の己^のと和^わせ
余^よハ其^{その}後^{のち}は残^{のこ}し墨^{すみ}く洋中^{ようちゆう}へ出^でくより寅吉このるを
知^しり大^{おほ}憤^{ふん}り刀^{やいば}と拔^ひて彼^{かれ}の傷^{きず}に外國人^{がくわいじん}と切^き害^{がい}せん
傷^{きず}ハ六^む是^こる處^{ところ}は船中^{せんちゆう}強^{きやう}劫^{けつ}一他^たの衆^{しゆう}組^{ぐみ}恐^{おそ}怖^ふるる故^{ゆゑ}
船^{ふね}も迷^め惑^{とく}の余^{あま}りハ寅吉及び元方^{もとがた}の外人^{がくわいじん}のりとも
或^{ある}島^{しま}へ上^{のぼ}陸^{りく}せめ船^{ふね}ハ遙^{とほ}く過^すりくく其^{その}後^{のち}寅吉
の生^{せい}死^し等^らと知^し他^た日^ひ々^{々々}復^{また}証^{しやう}を得^える布告^{ふこく}をす
○肥前長崎^{えぜんながさき}四^よ方^{ほう}キリシタンの宗門^{しゅうもん}ニ帰^{かへ}依^よせー者^{もの}共^{ども}ん

二千八百捕らる諸藩へ分配して御領を二する由
五月朔日の頃大坂を引くとの旨をきき又此事に
就く外は固より扱ひに入さうと先あり

京都新聞

○京都裁判所事 京都府より改められ成

京都府 府知事 長谷宰相

判事 青山小三郎

判事 松田正人

○丹波山家谷大橋危京府安いのうてうけし所洛西

西院村はたけ屋敷を得らしたる

○摂政地黄の地を能勢日向守も柳三防後小治の國に
為愛と名達らうの支度あり

○国月下旬ようの大雨と桂川出水所へ橋が流下
う渡伏見の町へも押水来りて舟を以て沈ませう
け森雨のためと麦稈種名泥水と印うと麦く芽を吹
んとと依之農人等大に憂悲せう

又島九婦小路の人家裏町の地形低き故に地盤を
ち同斗り石垣を築上け
三系より水く島九婦小路の
地盤を低あらしめお毎に雨に
ちよとよ

古きと違ひありし如け并の大雨にて石垣崩れ古き忽
 ち倒れ裏町の地底ありし小家を押し潰さる幸ひし
 して救済の人々無りけり我人々の家作何れと
 ひと付きて事を依り周る布告する所也

○去二月廿日大和太務世入彌の丑より外國人參
 朝の時英人は對し又傷及び一林田貞賢の遺骸を
 添ふるを寺の南なる伽藍觀音と云ふ寺に埋葬あり
 却敵有志の者ハけ寺に玉を祀り水とも向ふも其を
 一に并に玉り日永の東なる其山に改葬する由也

和蘭表戦争の新聞

○同四月三日の晩に総兵中山八幡に屯集せし城兵ハ
 藤堂倭兵須本之三より器械と後し一掃掃と云ふ言を
 述より我共共々其言も知らずれば其言は戦事にも不
 と其候の人々より龍牙藩の宿陣所西園圃向院へ報知あり
 依之同所より総督府達し直に先鋒百余人を繰出
 して徳兵を後陣も繰り出されし是又百人余を
 行徳川と開て新野村に陣をとり一城軍船路を封じ
 江戸表丸入するも其人と迎迎の村と探索し其

を成し兵糧を食ひたり此時より砲臺を遙々
既先子戦争に及ぶる筑前兵隊の堅村と行
徳より薩兵勢と一とをうて八幡中心より進軍
薩兵の中心より引寄せた村と吹味と一軍を進
む筑前の兵隊へ来り中刻に砲臺に着陣せしむ
佐土原の兵隊筑前の先子より平戦争終りたる
三子一同に砲臺を宿陣とせしむ
此日先子の戦争ハ小迫合より筑前の先子小勢
押行し筑前兵隊より一軍出しかけ合計十石内外の

砲戦なるが故に筑前兵隊の砲二發打出し少門と
二門も打撃し小砲とより一撃味方とるに撒兵と成て
迫合より筑前の討死兵士も人小者二人も負九人
城兵は佐土原街道大和田宿より山より引退せしむ
此日富原一の討死も亦多しとる末に懺成を成
翌四日薩兵勢佐土原勢小人数々本更津の方へ兵
を山に築前勢も救援の命を交し故に続て進軍せ
ざる時先鋒の二番を打撃したる程となりて筑前藩
の恥辱人に塞ぐるべく兵隊大に憤慨すたる中宇

河守彰の命と衆を以て故郷に不進を期しと隊長
之を誅一ト先兵隊と引纏め申す刻に至りし時
一引揚其首と進進し及び同所を陣跡とす一との
今と云くも後の河下知待居るしと云
野に常及、通し船の船と軍て下総の地
因四月四日の日付より京師小杉屋系来状に字
八幡宿出張し官軍福岡藩より阿武もてある
後如くもてある外に外に百人半り三ヶ所船橋
集りし東軍を合戦し陣跡あり武蔵の地と云ふ
イヤと知る破談をきくし根子重三此三日未だ東軍す
よう八幡宿中切也市川延進港に安し官軍一ト出張
あり夫と一なる大合戦に及ぶ官軍大紋小市川大と戦
て散る迹あり由風大烈愛一時大空お成市川延
焼失致し大砲四挺小筒數十挺を失ふも残金と云ふ
分をラレしと云ふ又此三日船より言及と云ふ
百人後死三隊行進し船橋に安しと云ふ
外に内海と船と云ふ船橋大野の社の山にありし
依倉後の人救東軍加勢内に出張致し又この夏に

イヤと知る破談をきくし根子重三此三日未だ東軍す
よう八幡宿中切也市川延進港に安し官軍一ト出張
あり夫と一なる大合戦に及ぶ官軍大紋小市川大と戦
て散る迹あり由風大烈愛一時大空お成市川延
焼失致し大砲四挺小筒數十挺を失ふも残金と云ふ
分をラレしと云ふ又此三日船より言及と云ふ
百人後死三隊行進し船橋に安しと云ふ
外に内海と船と云ふ船橋大野の社の山にありし
依倉後の人救東軍加勢内に出張致し又この夏に

諸國を而るるに全倭東方土民徳川氏二百年の治澤を甘と
 して旧幕を祖傳の徳継下りせざる素面故國一二の義士
 有るも多し信じてかゝるに追一加之作愈後方東軍に加勢せし
 のり或又城方修計の流言ありんを今擇り記せりとの
 関人懐徳考の言もあれしと多し讀者幸にしるべし

江戸表国四月七日出く書状中抜出

一 糸文を通じ同より市川行徳八幡に戦争連日
 一 刻江戸より僅四又里位に里程に遙に炮声おき
 一 分下総の方角天色赤くする中今兵火にあり

村に突く焼失致しけりる実と發く安を振る
 一 當地浪人凡千五百人餘に總て大將の極意命あり
 一 多若る在総に内追外分浪人俸者寄り集
 一 二千人餘にお成り由關東越る浪人共勢殊に
 一 一お成り上ハ何てお軍中容易に静るもふと
 一 何も思入況方と云ふ

一 江戸表方及軍目下総地は繰出に出張お成り下総
 一 丑人民の江戸に近き城市中混雑人々殊に
 一 發安安心を成思入中

又一通江表日月十日出中按書

一上野官様事来ル十九日急御發興以爲系は御出
之御領分百姓止少く歎願^{いんげん} 義^ぎ立^たて十文^{じゅうもん}より
面^{おもて}一同執事と存出上野由^{しんごう}及凡江戸中
町方口根歎願^{いんげん}書^し次^{つぎ}山^{やま}より出^で由^{よし}今日ハ下町一同
口根歎願^{いんげん}出^で由^{よし}右^{みぎ}付^つ分^{ぶん}多^{おほく}分^{ぶん}延^{えん}引^{しん}く^く成^{なり}と^と呼^よぶ
も中^{なかつ}京^{きやう}延^{えん}引^{しん}く^く成^{なり}役^{やく}出^で井^い左^さ衛^ゑの^の出^で立^たて^て成^{なり}是^{こゝ}より
以^も及^{およ}系^{けい}延^{えん}引^{しん}く^く成^{なり}由^{よし}中^{なかつ}よりし^しひ
一派^{いっぺい}津^つ金^{かね}津^つ金^{かね}船^{ふね}お早^{はや}城^{じやう}借^かり^り交^{かう}友^{ゆう}との^の民^{たみ}候^{こう}判^{はん}の^の之^{これ}

と^とより去^され六^む日^{にち}同^{どう}所^{しよ}より早^{はや}延^{えん}引^{しん}く^く成^{なり}江戸^{えど}系^{けい}り^り中^{なかつ}の^の船^{ふね}
之^{これ}甲^{かう}府^ふ分^{ぶん}派^{はい}津^つ金^{かね}系^{けい}り^り吏^しより江戸^{えど}に^に来^きり^り早^{はや}お^おく^く由^{よし}
い^いま^まと^と延^{えん}引^{しん}く^く成^{なり}お^お分^{ぶん}り^り中^{なかつ}の^の船^{ふね}

一ヶ頃^{いっけん}承^{じやう}り^り中^{なかつ}の^の會^{かい}津^つ金^{かね}小^{せう}田^{でん}原^{げん}、^{うけあひ}合^{あひ}合^{あひ}判^{はん}判^{はん}と^と上^{じやう}箱^{はう}根^{げん}所^{しよ}
関^{かん}所^{しよ}交^{かう}友^{ゆう}の^の成^{なり}性^{じやう}未^み絶^{ぜつ}切^{きり}り^り由^{よし}

右^{みぎ}通^と大^{だい}久^{きう}保^ほ家^け去^さ六^む日^{にち}由^{よし}他^たと^と成^{なり}中^{なかつ}の^の船^{ふね}

一去^さ七^{しち}日^{にち}回^{かい}幕^{まく}旗^{はた}本^{ほん}前^{まへ}之^{これ}旗^{はた}脱^{だつ}走^{そう}中^{なかつ}の^の合^{あひ}せ^せお^お来^きり^り

一昨日^{きのう}由^{よし}幾^{いく}町^{ちやう}ち^ち延^{えん}引^{しん}く^く成^{なり}紙^し紙^し通^と

右^{みぎ}ハ来^きル十^{じゅう}文^{もん}日^{にち}と^と西^{さい}城^{じやう}江^{かう}兵^{へい}房^{ぼう}等^{らう}時^{とき}速^{すみ}攻^{こう}令^{れい}者^{しや}也^{なり}

こつ署と

論者曰上野宮の御政系と云ふ止リ歟と云ふの
情態或ハ実多クハ一派津軍艦より城借リ請ヒ
及ハ小田原侯判箱拒性本絶切と今々虚説ナカ
會絨といふも其ハ不條理の極勅ハ致スルハ其
信託ナシバ東海樞要の街道三日を以テ以テ
報京師と達スルナリ且今津赤十字船を持しと
不智旧幕府もこれを借リ支ナリとも云ふ迄近日
中ハ大ニ浪靜ナリ旧幕臣何ぞ其ハ形勢あらん

油掛町予等來リ町名も改メ或ハ浪静ナリ
紙々文何をも不承ナリ蓋シ実多クハ其ハ
者ハ不智固より其據の説ナリ一要ハ浪静ナ
の救済何れも憑虚の説安キ信多クハ人ニ也

因四月廿七日就後高田辺四ノミ戦事ナリ

予等當月又日其新軍を得ナリ

○旧幕府脱走人其家浪浪後難波地多ク亦ハ屯集
在リ官軍と拒ミハ分因四月廿六日夜半ニ長州參
孫系分加州出張ニ監軍ハ明廿七日曉人数繰出シ方

あり初廿七日早天加州勢て高田勢と引違ひ加州
隊長水上隊隊長長島隊長松平隊長小隊
総波よりもあま丁半く度中を繰出し砲發及み
浪人方々も奮戦双方榮炮効多餘程か及勢多し
る内薩長勢も総波を焼打致し款四又丁半引違
官軍勢勢遠より進み頻う二及及び及勢多
の山も薩長松原の切れ潜伏し大小砲打立り分
堀官軍隊打進て彼山のトタ小高き所積勢多
小銃發打立り分浮浪輩在松原の切を
引

ふり控まりて彼の山を戦ひ致さる加州隊等も
進退し山上に進み水上等隊も演進し方
おどり大砲等打立お進み薩長及び内田方も
進退し如く官軍勝利出れし繰出さるお成
打たれ賊首級殺多しと来り越えおれ官軍も
手負ふ多しと何れも指別を越えも無し
板加州の弟も情弱の世評もわじし今般初も戦事
は兵士の進退聚散各其別とほく大勝利の天啓成
も隙を突き人目を驚かせり此破二藩前後の汚名と

雪ふくは是れりとのふ

猶内外の新軍を記さんと欲せられた出版の翌日あまた第五

又布告とて

因ニ日先般発行せし新聞の第一を見し粗漏のものあり
絶極しともあかざり抑と排斥あるゆかり是れは憎悪を遂ふ
獵師山とて意見とのる謗を等し新聞の新聞する所以を
知るも偏頗の端なり粗漏を厭ふは新聞の正統を
失ふなり向後ともども粗漏杜撰の事件なきを確たる
なり是等の微たる事ハ知識の尤もなる所なり故に
集者も又敢てこれを止むと

知新館告文

此社中ニ於テハ珍事并ニ諸相庭物等ヲ記スノ本意
ナリ又館外ノ人タリ凡世ニ功態アル事共ヲ衆人ニ
示サント欲セラルノ類ハ此社中へ御示談アラバ速ニ
上梓シ廣ク海内ニ布告スベキ者ナリ

浪華



知新館

大坂心斎橋本町南入 河内屋忠七
同 北久太郎町四丁目 河内屋清七
京都四条河原町西入 山城屋勘助

弘	通	所
大坂心齋橋筋北太即町並 河内屋 喜兵衛	同 全筋安堂寺町南 河内屋 和 助	同 北太即町三休橋西 河内屋 新次郎
京都三条御幸町角 吉野屋 仁兵衛	同 御幸町姉小路上 菱 屋 孫兵衛	同 三条寺町西入 吉野屋 甚 助
同 富小路四条上元 丁子屋 榮 助	同 寺町姉小路上元 錢 屋 惣四郎	

慶應四年戊辰五月十五日



内外新聞 第五

七日毎出版

知新館

内外新聞第五

神戸新聞譯

第六月止日
我五月四日

○方今ニ至リテハ當地ニ居留スル人民稍蕃
殖セリ然ルニ余等甚ダ病ル如ハ當地ノ路傍并
溝中等諸所ニ不潔ノ物 糞芥 類多ク此爲ニ頃日
流行セルコレラ病追々傳染シテ速カニ減スマジ
ク就テハ早速政府エ願達シテ不潔ノ物ヲ取除
カンヲ欲ス
土地ノ氣候ニ馴レザレバ万事配意スヘシ先日ヨ

リ雇^{ヤド}ヒノ不^{フジ}淨^{ヤウ}物^{モノ}掃^{サウ}除^ジノ番^{バン}人^{ジン}ハ甚^チ懶^{ラン}惰^ダニシテカ
ヲ用^ナヒズ尚^ナ精^キ出^ダスベキヲ諭^{サト}サント欲^{ホリ}ス堀^{ホリ}切^キニ埋^{ウツ}
レ込^コミタル塵^{チリ}芥^{アカダ}及^{セウ}ヒ屑^{セキ}石^{シヤ}土^ト砂^サ等^{ナニ}ヲ掃^{サウ}除^ジニ是^コ
ヲ海^{ウミ}邊^ベニ運^{ハコ}サシメ^ン若^モ此^{コノ}類^{ルイ}湿^{シツ}氣^キト暑^{シヨ}氣^キト混^{コン}シ
ナバ更^サニ惡^{アク}臭^{シウ}ヲ生^{タイ}シ大^{タイ}暑^{シヨ}ノ時^ジ分^{ブン}人^{ジン}身^{シン}疾^{シツ}疫^{エキ}ノ
害^{ガイ}ヲ為^ナサシ

大坂ヨリノ報告

○當^{ドウ}方^{ハウ}居^キ留^{リウ}地^ヂハ政^{セイ}府^フノ監^{カン}察^{サツ}出^デ張^{バリ}シテ多^セ勢^{セイ}ノ
雇^{ヨク}夫^フヲ指^シ揮^キシ大^{ダイ}ニカ^カヲ尺^{シツ}セリ此^{コノ}趣^スニテハ遠^{トホ}カ

ヲス成就^{セイジツ}スベシ

○外^ゲ國^{コク}人^{ジン}市^シ中^{チュウ}雜^ザ居^キノ免^{メン}許^{キョ}アリシ上^{ジョウ}ハ政^{セイ}府^フニ於^オ

テ高^{カウ}價^カニテ地^チ所^{ショ}ヲ買^カ上^{アゲ}ベカラザルヲ察^{サツ}セリ

○過^スシニケ月^{ゲツ}ノ頃^{コノ}銅^{ドウ}錢^{セン}二倍^ニ騰^{トウ}貴^キセリ以^イ前^{ゼン}十二

文^{モン}錢^{セン}ヲ以^カテ天^{テン}保^ポ一^{イチ}文^{モン}ニ換^カシニ今^{イマ}六^{ロク}文^{モン}ヲ以^カテ

一^{イチ}文^{モン}ニ替^カユル先^{セン}年^{ネン}來^{ライ}多^タ分^{ブン}ノ銅^{ドウ}錢^{セン}ヲ支^シ那^ナ工^{コウ}運^{ウン}送^{ソウ}

セシモ爰^{コノ}ニ於^オテ止^トルベシ

賣^{バイ}買^{バイ}物^{モノ}相^{サウ}場^{バウ}入^{ニウ}港^{コウ}物^{モノ}

○諸^{シヨ}品^{シン}相^{サウ}場^{バウ}ハ先^{セン}日^{ジツ}ヨリ寔^{カハ}リナシ頃^{コノ}日^{ジツ}連^{レン}日^{ジツ}ノ

雨天ニテ日本商人品物引取等ニ大ニ困リ入リ
居レリ當節賣品ハ黒吳呂并ニ短キライフル
銃ノ外注文更ニナシ

出港物

チタナムレンソダイノ生糸少々先日ノ價ヲ以
テ買入レシ當時賣品甚ダ少ク殊ニ望ミニ應ゼス
次第ニ新糸ノ時節ニ至リ今世日余ヲ過ギナ
バ新糸入来ルベシト余等頗ニ此ヲ待テリ
奥州夏月 五百廿兩ヨリ五百卅五兩マテ

ソダイ

四百五十兩ヨリ四百七十兩マテ

越前

四百十兩ヨリ四百廿五兩マテ

茶モ遠カラズ新茶入来ルベシ當時ノ新茶ハ
古葉ヲ交ヘ又ハ見カケ見苦シケレバ甚ダ此コ
嫌ヘリ此見カケノ惡シキユヘンハ急速ニ仕出シ
セシトシテ製法行届カザルガ故ナリ
前日買込タル新茶ノ價ハ甚ダ不相應ナレバ今
爰ニ茶ノ價ヲ記サズ

○薩長ノ兵隊新泻エ着ノ由ヲ聞リ此ヲ實ニシ

テ且勝利ヲ得ルニ至ラバ外國人ヲシテ彼地ニ移
住スルコトヲ得ベシ既ニ彼地居留場ノ用意セ
ラレシ由ヲ聞リ此後ヨキ報告ヲ得ハ或商人ヲ
伴テ速ニ彼所ニ赴クベシ

○第六月廿四日 我五月五日 今朝テスハツチ著ニ依

テ本月十七日 我四月廿七日 新聞紙ヲ得テ尤ノ事

件ヲ拔萃セリ

昨日数多ノ兵隊ヲ乗セテカバノカミ名船江戸ヨ
リ来リ港中ニ碇泊シ南方ニ運送スル人救

食料等ヲ積込タリ米國全權公使ハ同國イロ
クオイス名船ノ船將ト一致シテ小舟ヲ以テ水師ヲ
送レリ

○三條大納言殿ハ先ニ徳川家トノ間ニ起リタ
ル大難事件ヲ裁断スルノ全權ヲ蒙ラレ京
師ヨリ発シ水曜日江戸エ着セラレシ

○第六月廿五日 我五月六日 米國飛脚船コスタリカ名
横濱ヨリ長崎上海エノ便ニ當月卅日 我五月
當港エ着一昼夜碇泊スベシ旅人并荷物等

有ラバ神戸スミツ、ベークル社中マデ申来
ルベシ

○長サ二十六尺ノ小舟一隻帆柁并日覆等
備リタルモノヲ賣拂ニマトヲ欲ス若買ント欲セ
バ神戸ジ。テ。カルロル社中マデ申來ルベシ

以上

四月下旬越後より信州迄と經て

京師、來り、豫定の物結

○脱走し歩兵第飯山の城下に來り隊長古居
佐久左衛門より城内に言送りける、我々は是より
松代表に立越ぬ故、此言當藩より松代に應
接し及びむつるなど、との儀なり、依り飯山藩へ
鈴木系と云士と松代に参り、談判し及びる、松
代藩も松代に脱走人共と城下を在留せしめ
らるゝ、豫定の事とす得との事より大抵論を成す

松代藩と対立したる由を沢井と飯山より古参、
區々あつしうども今一應談判つて異論なく旨
紙方強て了む付事ひて使者を松代に送りぬ
松代藩より返答も不及使者に談判止し直
軍勢を繰出し飯山の登りては事飯山、
えけい屯集の歩兵も飯山藩と手合を合し
千曲川を隔て防戦し及ぶる然るも松代勢より
城隊に打掛る銃砲より怪我人あれども飯山勢に
打出し貼人々を挟むる根ふなく又飯山の兵隊を

松代勢に發する時も同根より爰は於て城兵も
不審を生し潜り飯山の陣を窺せし不果し
双方より空砲を打ち合居る依之城軍初めは
計は陥入るを曉る大に怒り忽ち飯山の兵隊に
砲發し戦争をひふとも双方より打立られ
終る飯山一飯山城下真宗寺と云寺院に逃げ
たり松代勢に続々押寄せ大砲を打ちつきけ
此亦も城兵の勢は城下の民家へ火を放ち煙を
きく乱妨を働きて越後路に放走を松代飯山

兵を合し追討し大に勝利を収むる由
傳へ曰ふ如く松代より終本系を討たしむるも
再度の使者を止めしむるも兩藩内應の謀計
より賊と欺きたるなりとて

右の歩兵多し初め高田へ来り荒井村と云ふ所
集せし内は惣勢八百人より内百三四十人飯山
より又退き荒井村より飯山へ應援の兵を繰出
一昨は殺害し再び荒井村に逐集しし度
高田藩及び信州勢は打立てしとて

打撃を敷礼し退きたり隊長古屋統久たる
は落行中宿源より承と云者ハ討ちし由

上州権田表平定の況

○旧幕府旗本より外國奉行たる一と云小栗
上野より上州松井田駅より三里おたる権田と云
る領地より移り居るなり所は税吏人屯集
せし由其聞へたる因る因四月と旬高崎藩安中藩
外一處に於て討ちの命を蒙り彼此へ發向し談判
し及ひ上野より降伏罷兵を官軍に請ふ事あり

すく平定せりとせ

又説又同四月七日高崎安中二藩より人救を乞
向上野々及嫡子亦一郎を擒錮して同九日
岩倉殿の御座武忍に送せりと

二説大同小異何れを多きを以て知れ
兩説を記して世人の辨別を待つ

京都新耳

○近日江州大津裁判所を大津勘定所と改ら
せしり舊大津藩系同所を在勤なりと

○防忍岩國吉川候と諸藩の列に加くうと
武備も紋襖等を記して追々發給する由
○五月十日薩忍の兵隊東方に繰出せり
門下句ふ園元より計千余人の勢より上京の
風聞あり

○同九日夕七時以四糸通祇園町より馬上
の士に斬りきたる狼藉者あり然るは近來
る馬を故打外一馬の尻を切付るに彼の
馬驚あがり時々狼藉者を蹴倒しをり

ふくろり如何なる言致なりや其来由を聞かば
他日發給の勅耳に記さべ

○若州小濱志州多羽の二藩に帝より至て御ふ
審の廉 御免なりと云

○国四月下旬議定職の諸侯に官位 宣下せ
作出度越前侯及び肥前侯より以辭退お成
ひ由別尤き書付ハ越前侯より或方様に以辭
退に知せし御使者の以上を

今般議定を 作付り又後二位推中納言

宣下せ 御付官位に候すは 祿祿お給に
此 聞及右處に知以仕者なりと云

五月三日

越前宰相使者

山野澤二

○京師下立要通妙に寺門如何来の家
天氣快晴の時と云ふも 穢洗米大豆等のもの
何方よりとも知らず降りて来りし由當に
そなたのありしやと云ふ家内に熨斗絶金砂

土器に托餅菓子燭燭紙墨等々外精魚の食
物業等の諸品陳列する所今又止是金
其家又ある法守稻荷の奇瑞なりとて以て
又其社と再建して尚更なる由と耳に
論者曰昨外年冬京振及び緒玉又神符と
摩し令残諸物と摩し持て怪異あり
右の怪異も同日の疾く取奇と云々
是れ又信ぜざるもあつたるべし然り
とて童幼婦女子とてあつたる方々

見耳と持くしめざるは故人狐狸の爲に
欺るるの患あるを除うんと爰又死を

江戸町人共歎歎書の寫

右思以書付を歎歎に

一私に云下紙に所を以て思ふ願を歎歎
人儀は思ふに思入之は是と歎歎
平に御忍澤に浴しゆ金
天朝并徳川家の思忍澤に思入る今日
この場合下紙に目る更なるあり

各山寺之兵追々町奉行所より市中に
 觸出さるる書付等の趣より久思東
 山に謹懐罪を此一紙に列請諸人の苦
 を以救い其の托交厚キ思召く程如何こそ
 難有幸忍入済任く至る所迄は然ル要て
 追々市先陣以繰入お成ひて付市中
 一同昼夜殺害を志す忍痛在る何事
 廣大く以慈悲を以る下く者此と安
 公仕人振出憐愍く清沙汰に成下置人

振一同市郎上いひ

四月又日
 連名
 九十人

衣ハ市先陣く宿所に居出ん款取書
 弱也巢鴨小石門音羽大塚谷中本郷
 坂田町人熱代加判く書面なり

越後縣波戦争第一の報告ハ既に
 第四編に載せり今又第二報告
 と得たりたの如し

○閏四月廿七日絲波の賊徒共加州薩沙長如
高田勢日押詰られ紋走せり則官軍透る
追打進みぬ右賊徒共城山側の松原に屯集
一浮浪衆と一勢にお成り半途より引返
大勢と張り官軍と拒む大小砲お出ぬ故
官軍一同攻勢猛烈なり戦事とお成り内款
の奇計ニ以て味方打ト一同高嶺にお喚ひ
跡を弭せ一同道に廻り人救ふを有る
安がと打方止し演よぬが引揚透る人如

故より尚頻りに放發又及び及を故の策なり
と覺る真にお向激戦せり就中加州の大砲の
賊軍の必要なるふに打てて多分の死傷
もあり賊勢弱りぬが砲發もる遠にお成る
追撃て殺さるるは參孫折田平肉を食ふ
日書くお本陣より負を告ぐ今日ハ休兵を
指圖に及びり加州後陣二小隊繰出同ふお
高ノ先鋒を本陣青海村に引揚ぬ故ハ同
幕歩兵組及び素衣從藩凡千人斗ふ中

柏崎に追々集りい倅又あそい戦争滅使
 死傷多しと雖も要害又援り弾薬もあつて
 又々夜更打立官軍も手負多しあつて
 之も新機まだ猛烈又戦ふ由加州先鋒隊
 長物以高畠猪左夫洗登し進み総統士と励
 しそ此右の肩と打貫き手負とつても引揚
 と始終組子と指揮し全く勝利とせし大
 砲分隊司令格本一進も格別二働しと云
 山道に進み加州勢物以格本美和総統

手の内十八九人歟を現打つて何れも歟
 一人つ討死し由そ外産長高田勢も切腹ホ
 ありと云も甚細かり兼し由

社中より布告二端

○神戸新聞譯中々ある如くコレラのコレリ病流
 りせんとす由去月己未の氣候より波の地
 不限傳染流行す由と記されど世人早く自
 護保全あつて其大概をたて記す
 三毛子等々多スル
 茶葉を室内より薫べ
 此後茶葉を用ひざる由
 茶葉茶と云て求むべし

又杜松子 小豆の屑と煮てもとく
右も破る 衣具衣類等と合し雨湿の氣を
拂ふなり 根菜より

大柴胡湯 人の生質よりて茅硝 石を煮る

升麻葛根湯

右の數を用ひて 虎肉とある 雨湿の氣を拂ふ
一飽食大酒消和あり 食物肉食亦用按み
一公を考へ 元氣をるる 其をを情し
右の病をひく 用ひあり 要い 医家 同く

三蟲油と云金瘡の妙薬

一雞卵 皮を去る 一蚯蚓 其す

一蝸牛 殻を去る

右一種宛別は 搗たぐらう 銅管の中に
結ぶ 湯の如く 文武火は かけ 膏をとり
そへて 後三種を合し 器に入し 貯め
る 用ゆる 時ハ 其す 疵に 一 流し 込上を
本條より 酸と 色墨と 如何程の 深痕
くても 奇妙は 治る 由 世の 好士 閑暇の時

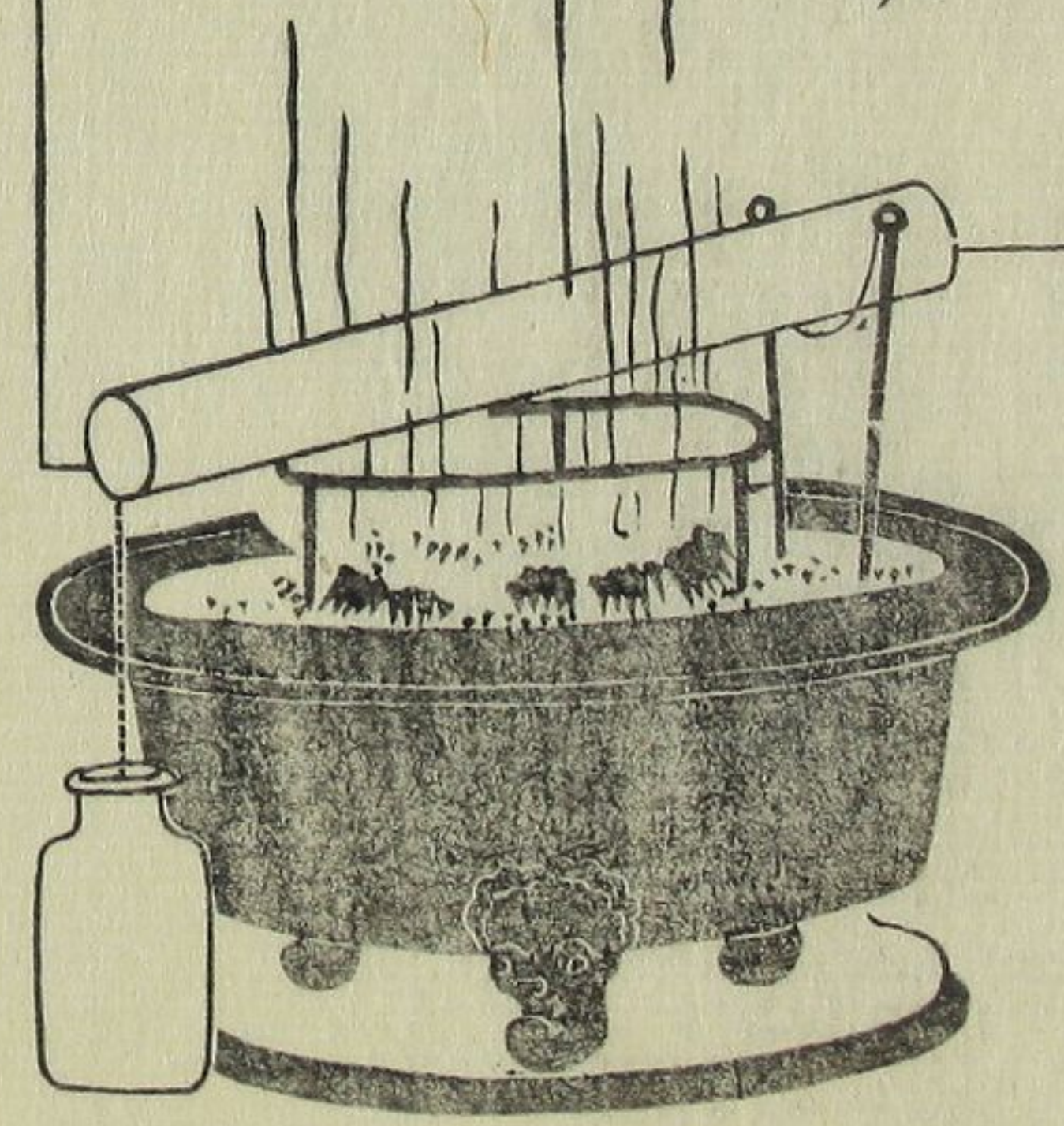
製一紙とせし経験ありんるを希ふ

膏を取図

銅の管のま中へ兩方より 燒込火こくべし

管をよき生井

此小にようき一ト燒つりるを器へとく



古金名を小割書

一朱金

百兩代 二百二十七兩一分三朱
一兩代 二兩一分ト永二十四又三七五
一朱代 二朱ト永十七又四八四三七五

二朱金

百兩代 二百六十兩三朱
一兩代 二兩二分一朱ト永三十九又三七五
二朱代 一分一朱ト永十二又七三四三七五

保字金

小割一分共

百兩代 三百九十六兩二分一朱
一兩代 三兩三分三朱ト永廿八又一二五
一分代 三分三朱ト永廿三又九。六二五

安政
二分判

百兩代 百六十一匁三朱

一兩代 一匁二分一朱 永四十九匁三七五

二分代 三分ト永五十五匁九三七五

百兩代 三百十七匁一分

正字金

一兩代 三匁二朱ト永四十七匁五

一分代 三分ト永四十三匁一二五

右の永銭えいせんの時の沙さお坊ぼうをか多おほて永何文の代銭何
百何十何文と云々を知しるなり

知新館告文

此社中ニ於テハ珍事并ニ諸相庭物等ヲ記スノ本意
ナリ又館外ノ人タリ凡世ニ功能アル事共ヲ衆人ニ
示サント欲セラルノ類ハ此社中へ御示談アラバ速ニ
上梓シ廣ク海内ニ布告スベキ者ナリ

浪華

知新館

大坂心斎橋本町南入 河内屋忠七
同 北久太郎町四丁目 河内屋清七
京都四條河原町西入 山城屋勘助

弘 通 所

同 寺町姉小路上	同 富小路四条上	同 三条寺町西入	同 御幸町姉小路上	京都三条御幸町角	同 北久太郎町三休橋西	同 全筋安堂寺町南	大坂心齋橋筋北久太郎町北
錢屋惣四郎	丁子屋榮助	吉野屋甚助	菱屋孫兵衛	吉野屋仁兵衛	河内屋新次郎	河内屋和助	河内屋喜兵衛

